
各駅停車ショートショート

楽天家masa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

各駅停車ショートショート

【Zコード】

Z3860D

【作者名】

楽天家masa

【あらすじ】

それは小さな町の物語。さまざまなお話が織り成す短編ストーリー。

街角の珍事

これは小さな町で起る物語。

（柳敬太の場合）

「あのぉ……すみません」

ある屋下がり。俺は椅子に座っていると二十歳くらいたと思われる女性が声をかけてきた。

「変なのを拾つたんですけど」

青い制服に身を包み、いかにも正義の味方ですと強調している俺の格好は警官の姿だ。

「あいつがどうぞこります。中へどうぞ」

女性を中心へ招きこれ、椅子へ座るよう促す。

「それじゃここがお前と住所をお願いします」

適当なメモ帳を差し出して名前と住所を書いてもらひ。

「それでは落し物は派出所で預かっておきますね」

女性はそのまま派出所を出て行った。

「さて……と」

俺はその落し物を自分のポケットに入れると、何事もなかつたかのように派出所を出た。

「二のスリルがたまんねーな

俺、柳敬太は警官ではない。むしろ泥棒だ。最近通販で手に入れた警官の制服を着ては誰もいない派出所で警官のふりをして落としものをくすねている。

「それにしても何だこれは？」

女性が持つてきたものを感じたりみると、ただの鉄の玉だった。

「もつといいものを持ってきてくれてもいいのにな

そのとき、前方に自転車に乗った警官の姿が見えた。

「やべつー 本物だ」

あわてて落し物を胸ポケットに入れ、帽子を口深に被り平静を装つた。

「二の苦労様です」

相手が敬礼をしてきた。

「二の苦労様です」

「……は俺も敬礼をしてやり過ぎをなまめ！」

「あまり見ない顔ですが新人ですか？」

「は、はい！ 今日からこの辺りの警邏に当たらさせていただきます柳敬太巡査であります！」

しまつた！ つい本名を言ってしまった！ しかもなんだこの不自然な言葉遣いは。

「そうですか、頑張つて下さい。それにしても中途半端な時期に入ってきたんですね」

「えつと……ちょっと海外で経験を積んでからですでので」

どうしちゃったんだ俺の口… よくもそんな嘘がペラペラと…

「海外でねえ。治安維持の経験ですか？」

「えつと、柔道留学をば…」

そんなのしたことねえ！

「まあいいでしょ。ちょっと一緒に巡回しましちゃうか

俺は榎部長に腕を引っ張られ、町内を一周させられた。

「ちゅうとおなかがすきましたね。コンビニでも行きましょうか」「は、はい」

俺はいつばれるかヒヤヒヤしながらも後をつけていった。

「あれ？」

「ハンドリーに入つて異様な雰囲気に気づいた俺は息を呑んだ。

「くそ！ 警察か！」

そのハンドリーには数名の客、そして明らかに敵とは違う、おびえた店員に包丁を突きつけている男がいた。

「柳巡査。君柔道留学してたんだってね。期待してるよ」

榎部長は小声で俺に言つてきた。

「ひ、ひ、ひ、動くな！ こいつを刺すぞ！」

こきなりの警官登場に動搖したのか、強盗は声が上ずつてこる。

「どうぞどうぞ！」

そして俺も動搖して声が上ずつていた。

「落ち着きたまえ柳巡査。私がお手本を見せましょう！」

榎部長は一瞬のうちに拳銃を抜くと、一発の銃声が店内に響いた。

「ぐあっ」

次の瞬間、男の持つていた包丁は弾かれていた。

「へやつー」

男はそのまま裏口から逃げていった。

「や、榎部長！ 犯人が逃げますよー！」

「……そうだね。でも別にそんなのはどうでもいいのや」

さつきまで温和な顔立ちだった榎一郎巡査部長が、まるで別人のように冷たい顔になっていた。

「金を出せ」

拳銃を店員につきつけると、榎一郎は脅し始めた。

「こいつの威力はさつきの強盗で実証済みだ。死にたくないれば金を出すんだ」

女性の店員は恐怖で、言われるがままレジの金をそのまま榎一郎に渡した。

「お願い……殺さないで」

俺はすぐに逃げ出したかったが、女性店員のすがるような目に動けずについた。

「や、やめやつー」

いつの間にか俺の口からそんな言葉が出ていた。

「今やめやつて言ったのはお前か？ 俺と同じセイ警官の柳巡査」

ばれてた！

「そ、そうだ！　強盗なんてみつともない真似、一セ警官の名がな
くゼー！」

つて俺は何を言つてんだ？　そういう間にも銃口が俺に向
けられる。

「これでも俺は元軍隊出だ。銃の扱いは慣れてるぜ？」

俺は足がガクガクと震えていた。

「撃てるもんなら撃つてみろー！」

その瞬間もう一度銃声が店内に響いた。体にものすごい衝撃が走
り俺は吹っ飛んだ。

「死ぬー！　もうダメだー！」

胸を押さえて苦しむ俺。しかし、なぜか死んでいない。というよ
り血の一滴も出でていない。

「そこまでよ！　榎一郎！　強盗の現行犯で逮捕するー！」

恐る恐る目を開けてみると、手錠をかけられている榎一郎。その
手錠をかけているのは派出所で落し物を届けに来た女性だった。

「みなさん落ち着いてください。私は警視庁市民課の大山警部補で
す」

器用に警察手帳を見せながら榎一郎を取り押さえている。

「助かつた……のかな？」

俺は胸ポケットから銃弾を食い込ませた鉄の玉を取り出した。

「こいつが助けてくれたのか」

「ええそうよ。まったく、最近ニセ警官が続出するつて通報があつたから探つてたらやつかいな事してくれたわね」

「俺、ニセつてばれてたのか」

「ええ、柳敬太と榎一郎、この二人が怪しいと見てまずは柳敬太から見張つてたんだけど、まさか榎一郎も出てくるとはね」

「じゃあこの鉄の玉は？」

「発信機よ」

よく見ると銃弾で出来た裂け目から赤い光が見え隠れしていた。

「あら、応援が来てくれたみたいね」

数人の本物の警官に榎一郎は連行されていった。

「さて、柳敬太。詐欺罪の疑いで署まで来てもらつていいかしら?」「ちえつ。体張つてまで強盗捕まえたのにつかまるのかよ」

「あたりまえでしょ? まあ温情はあるけどね。手錠されないだけましだと思つて」

大山警部補につれられて店を出ようとしたとき、不意に後ろから袖を引っ張られた。

「あ、あの。ありがとうございましたー 出てきたらまたこいつで寄つてくださいー。」

「コンビニ店員のお礼を言わせてまんざりでもない俺だった。

「これからは眞面目に働くのも悪くないかもな
「なんなら本当に警察署官になつてみる?」

ニヤニヤしながら大山警部補がたずねてくる。

「やなこつた」

これからは俺にもちょっとはまともな人生が待っている。のかも
しれない。

（柳敬太の場合） 終わり

お好み焼き屋の秘密

「これは小さな町で起る物語。」

（浪花良太郎の場合）

秘伝のソースや鰹節の匂いが充満する中、ねじり鉢巻をして新聞を読んでいる男がいた。

「世知辛い世の中やなあ」

男の名前は浪花良太郎。小さな町でお好み焼き屋を営んでいる。

「小麦粉がまた値上がりか」

目を通しているのは経済新聞だった。しかし、書かれているのはお好み焼きランキングやたこ焼きおススメスポットや行列の出来る焼きそば屋など、つい祭りに行きたくなるようなラインナップだった。

「まいど～」

ガラガラと引き戸を開けて入ってきたのは小麦粉業者の松屋章吉だつた。

「今日の仕入れ分やで」

「いつもすまんな。そこにおいといてや

「「」が店用で、「」に持ち帰り用置いとくよー」

浪花良太郎のやつている店では、お好み焼きの材料の持ち帰りをやつている。お好み焼きの味が評判を呼んで持ち帰りたいという客が後を絶たなかつたため、持ち帰りを始めたのだ。しかし、良太郎は出来立てじゃないと味が落ちる！ とのこだわりを持っているため、材料を持つて帰つてもらい、自分で焼くよつさせている。

「ほな、あたしはこれでおことませねてもうこまつせ
「松屋の旦那、また今度頼むよ」

それから良太郎は開店の準備にとりかかつた。

「うーむ……」

いつもどおり店は開店した。だが、客はいつもどおりではなかつた。

「「」ちゃん！ 豚玉一つ！」

「あこよー」

いつもどおり店は繁盛していた。しかし、いつも見かけないような客が引っ切り無しに訪れてくるのだ。

「「」ちゃん！ 持ち帰りで！」

「あこよー」

いつも見かけないような客は、サングラスをして、表情は硬い。

そして服の下には虎や龍の模様がありそうな方々なのだ。

「二一ちゃん、金二に置ことくでー」

「まいどー」

そして、その怪しい密は決まって一万円を置いていくのだ。ちなみに持ち帰りの金額は八百円だ。

「儲かるのはええんやけど、なんか怪しいなあ」

閉店後、訝しげにそんなことをつぶやいていた良太郎の目がふと小麦粉に留まる。

「ま、まさか……」

良太郎は二二かの三番倉庫でやり取りをされたうな場面を思い浮かべた。

「……これはー!」

白い粉を人差し指に少しつけて舐めてみた良太郎は驚きを露せなかつた。

「二んな上質な小麦粉は食べたことがねえー!」

普通の質のいい小麦粉だった。

「でもこれが一万とは思えねえなあ

謎が深まつただけだった。

「じょうがねえな、突き止めてみるか

良太郎は、次の日怪しい客をつけてみることにした。すると不思議なことに、どの店でも一万で支払いをしていた。

「どうじうじうことだ？ 砂糖が一万もするのか？ 片栗粉が一万もするのか？」

つけ始めてから一時間ほど経ったころだろうか。一つのビルの中へと入っていく。良太郎は物陰に隠れて様子を伺つた。

「それにしても見つかりませんね兄貴」

「おうそうだな。それにしてもオヤジにも困ったもんだぜ。この町のどこかに時価一億円の麻薬を隠しただなんてな」

「しかもそれを自分の目利きだけで一万円で買いなおしてこいだなんて、いくら小さな町でも無理つてもんですよね兄貴？」

「まったく。白い粉を売ってる店がスーパーだけで何軒あると思つてるんだ。しかもお好み焼き屋まで粉を売つてるときてやがる」

小麦粉……砂糖……片栗粉……白い粉……麻薬！？ 良太郎の中でキーワードがぐるぐると回りまるでホームズの「じく理解した。(どこがやねん)

「あいつらヤクザだったのか。それで白い粉を集めて一億円の麻薬を探してたのか」

その時、良太郎の見たことのある顔の人物がビルに入ってきた。

「どうや？ 見つかつたか？」

「オヤジ！」

「いい加減見つけたらどうだ？ 麻薬を見つけたやつにはこの松屋

一家を任せることになる

やつ、中に入ってきたのは小麦粉業者の松屋章吉だった。

「ま、松屋さんはヤクザだったのか」

良太郎は逃げ出さうと踵を返したところだった。バキッといやな音を立てたのは。

「誰だ！ そこにいるのは…！」

しまった！ と心の中で思つては見たものの遅かった。

「おやおや、浪花良太郎さんではないですか」「いやあどうもどうも。お世話になつります」

松屋章吉はその場にいた部下一人に目配せをして、拳銃の銃口を良太郎に向けさせた。

「残念やな。あんたのお好み焼きはなかなかおいしかったんやけどな」

殺されると悟つた良太郎は自分の知りうる限りの知恵を振り絞つた。

「ここの場にあるものでなんとかならないか……」

そこにあるのは無数の白い粉だ。良太郎はあることを思い出した。それはまだ良太郎が見習いのとき働いていた店で小麦粉が散乱してるところに火をつけたところ厨房が爆発を起こした事件だ。

「使える！ 粉塵爆弾だ！」

良太郎はとっさに辺りかまわらず粉の袋を破つて部屋の中に粉を充満させた。

「兄貴！ やつちやいましょー！」

舎弟は銃をぶつ放そつとしている。

「バカヤロウ！ 死にてえのか！」

松屋章吉は必死にとめた。

「引火したら爆発するぞ！」

「今のうちに俺は逃げるとするか」

良太郎はそそくさと帰ろうとしたときだった。

「動くな！ 警察だ！ 抵抗すると打つぞ！」

どこからか駆けつけた刑事と思われる人物が銃を構えて松屋一家に叫んでいる。彼の名前は大木幸男。刑事になりたての新米刑事だ。過去六回腹痛で試験に落ちて七回目でやっと刑事になれたと言うなかなか不幸な人物だった。

「よーそのまま銃を置け！」

じわりじわりと幸男が松屋一家に近寄る。しかし、不幸な人生を歩んできた彼の足元にバナナの皮があるのは当然なのかもしない。

つるりん。

「あーれー」

ズキューン！ ドゴオオオオオオオン！

滑つて転んで銃が爆発して爆発した。彼ならではの恭順だ。数刻後、アフロになつた五人が警察によつて保護された。

「さて。松屋章吉。一億の麻薬はどこに隠したのだ？」

松屋章吉は取り調べ専門の山さん刑事にライトを当てられていた。

「浪花のところに届けたさ。もつともどつかいつまつたみたいだがな」

果たして麻薬はどこに消えたのだろうか？ 二の謎は一向に解けないみたいだ。

ちなみにこの田浪花良太郎のお好み焼きを食べた客は何故かもう一度食べたいという衝動にひどく駆られ、数日間行列がやむことがなかつた。良太郎は自分の腕が上がつたと確信し、二号店を出す計画を立てている。

（浪花良太郎の場合） 終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3860d/>

各駅停車ショートショート

2010年10月22日00時03分発行